

2026 年度 総合型選抜 A O入試<第 1 次選抜>

小論文

【理工学部 住環境デザイン学科】

「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマにした大阪・関西万博が、2025 年 4 月 13 日から 10 月 13 日まで開催されている。会場の主動線となる「大屋根リング」は「多様でありながら、ひとつ」という会場デザインの理念を表すシンボリック建築物であるが、会期終了後もその一部を残す計画がある。

次の文章を読み、大屋根リングの一部が残置されるとして、その価値や懸念点について、あなたの考えを横書き 600 字以内で述べなさい。なお、必ず以下の 2 つの視点を交え、論述を行うこと。

- ・ 50 年後のご自身の視点：2075 年のあなたが大屋根リングに対してどのような考えを持っているかを想像して記述してください。
- ・ 50 年後に 20 歳になる方の視点：2055 年生まれの方が 2075 年に 20 歳になったとき、大屋根リングに対してどのような考えを持っているかを想像して記述してください。

先週、大阪を訪れた。万博会場への乗り換え案内を横目に、新大阪駅から向かったのは吹田市の国立民族学博物館。1970 年の大阪万博の会場跡に 77 年に開館し、世界各地の民具など 34 万点超のコレクションを誇る。その日も展示室でちょっとした旅気分を味わった。

▼前回の万博跡地に「万博の森」と称される広大な公園が整備され、民博ができたのは奇跡に近い出来事だったらしい（吉村元男著「大阪万博が日本の都市を変えた」）。樹木の生育も難しい痩せた土壌を多様な生物のいる森へ。しかもふつう 100 年にかかるのを 30 年で実現せよという。難題に挑んだ軌跡が本に記される。

▼民博設立の構想は万博のはるか以前に遡る。後の日銀総裁、渋沢敬三が 35 年に国に陳情するも実現せず。民族学者の梅棹忠夫らが万博を機にその夢をかなえた。若き学者たちが世界に派遣され、万博での展示に向け収集を進めた。一方「低開発諸国」の祭具などを一方的に集める手法には東大の学生らから反対声明も出た。

▼翻って開幕から 2 週間あまりとなる万博。会場のシンボル「大屋根リング」の一部をレガシー（遺産）として残す案が浮上した。会場が更地になってしまえば、開催時をしのぶよすがにはなろう。もちろん、かさむ維持費を懸念する声もある。万博は 50 年先に何を贈るべきか。活発な議論を始めるのに早すぎることはない。

出典：日本経済新聞、朝刊 1 面 春秋、2025 年 5 月 1 日

利用許諾番号：002367